#36

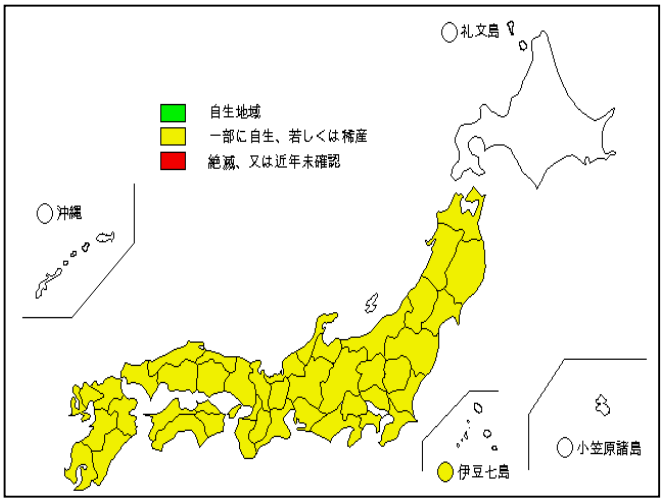
ウチョウラン

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

Orchis graminifolia

ウチョウランの自生地(愛知県奥三河　09.7/05)

北海道と沖縄を除く全国に自生する小型の地生蘭です。渓流沿いの岸壁にイワヒバやセッコクなどと共に自生します。6～7月に桃色で大変可憐な花を咲かせます。日本を代表する蘭の一つで古くから好んで栽培されています。似た環境を好むチドリ類にはイワチドリ、ヒナラン、コアニチドリなどがありますが、本種はこれらの中では一番日当たりと乾燥を好むようです。一枚の渓流沿いの岸壁で、水面ギリギリにイワチドリが生え、その5～6m上にイワヒバとセッコク、ウチョウランが自生しているような場所もあります。 花1輪は10mmにも満たない大きさですが、渓流沿いの大岸壁で、岩の灰色とコケやイワヒバの緑が背景の場所に桃色の花が数株の群落を作るだけでも非常に目立ちます。より種子の結実率をあげ生き残る為、虫にアピールするよう美しくなった蘭ですが、皮肉にもその美しさの為に小銭目的の心貧しい人間に執拗に狙われ絶滅寸前まで追いやられてしまった悲しい蘭でもあります。



全国の冷涼な山地に自生します。

自生地の岩場(愛知県奥三河　09.7/05)

昔(といってもせいぜい3～40年ほど前です)は日本全国の渓流沿いに普通に見られたものですが、このあまりの美しさにより業者による大規模な盗掘が繰り返され、今では全ての県で絶滅寸前にまで追いやられ、肉眼で見える範囲はほぼ全て盗掘され尽くし、僅かな自生量を残すのみとなっています。かつては手の届かないほど高い崖の自生地も、ロープをたらして根こそぎ盗掘されたそうです。自生地の株の周りには自然実生による子苗が多々見られますので繁殖率は旺盛なほうだとは思いますが、盗掘の勢いはそれをはるかに上回り加速度的に減少していきました。野生蘭の減少は開発による自然破壊が主で、それに次いで悪質業者による大規模盗掘の影響が大きい、というのが通常ですが、このウチョウランとカンラン、エビネ類、セッコク、フウランについては悲しいことに販売目的の大量盗掘が一番の減少要因になっています。

Document and photo by LittleFlower 2009

入手は容易で商用生産も盛んに行われており、最近では山野草店はもちろんホームセンターでも販売されています。これらは花変わりの品種を生産する際の選別漏れで、いわゆる「並花」と呼ばれていますが、原種ではありません。大型で花付きもよく強健で、何より安価なので気軽に栽培できます。今絶滅が懸念されているものはあくまで原種であり、このような並花は生産余りの状況なので、1球100円程度から入手できます。 栽培も比較的容易で、一般的には小さめの素焼鉢に日向土＋赤球など水はけの良い用度で2～3株づつ植えます。大きめのイワヒバの根にちょっとだけ穴を開けて、そこに球根を植え込むと自生地に似た風情を出すことができます。風通しの良いところで棚に並べて寒冷紗の下で管理します。通風、日照、潅水の3点に気を使ってあげれば手間もかからず綺麗な花を咲かせてくれます。

自生地の岩場（愛知県奥三河　09.7/05）

自生地の岩場（愛知県奥三河　09.7/05）

増殖も容易で、株増殖もしますし環境が合っていれば自然実生でも増えます。種子を採取して取播きする場合には、シュンランなどのラン科植物や親株の根元に播くと翌年発芽する可能性があります。寒天を使った無菌培養であれば大量の苗を得ることができます。あと、ラン科の植物（特に着生種ですが）はダンボールが好きなようで、本種はダンボールチップを用度に用いてそこに種子を播くという方法でも比較的高い確立で発芽、成長させることができます。（ダンボール実生法）ダンボールの材質と中空構造が良いのでしょうか。

ウチョウランは地域による個体差が大きく、下記の名称で呼ばれているものは全てウチョウランの地域変種です。距が短いクロカミラン（佐賀）、花弁が丸くやや大型で花数が多いアワチドリ（千葉）、リップに模様やスポットの入るサツマチドリ（鹿児島）、その他ウチョウランとの明確な違いは不明ですが、自生地によりクロシオチドリ（長崎）、オオウチョウラン（愛媛）、ショウドシマウチョウラン（香川県小豆島）、テバコチドリ（愛媛）、サヌキチドリ（香川）、ミマサカチドリ（岡山）、ガンコラン（千葉）などと呼び分けられています。また、ウチョウランは高山性樹木着生種のヒナチドリとの交配が可能でスズチドリと呼ばれています。

自生地の岩場（愛知県奥三河　09.7/05）